

永井荷風と『紅樓夢』

NAGAI-KAFU AND
THE DREAM OF THE RED CHAMBER

呉 佩 珍*

KAFU's literary work was influenced by Chinese literature in many ways. The relationship between KAFU and Chinese literature has been pointed out before, nevertheless, how concretely Chinese literature influenced KAFU's works has still not been motioned. Thus, in this presentation I will attempt to investigate and clarify the various influences *THE DREAM OF THE RED CHAMBER* had on KAFU and his works, especially his famous novel-*BOKUTOU KAI DAN*.

The connection KAFU had with *THE DREAM* came from his father, KAGEN, who was one of the KANSHI poets of the MEIJI period. The Chinese-style poetry -*SHO SHO*- and so on of KAGEN's KANSHI works took *THE DREAM* as their source material. MORI KAINAN'S criticism of KAGEN'S poetry that is concerned with *THE DREAM* is especially worth reading to illustrate the connection.

* WU Pei-chen 台湾省台北市東吳大学日本語学科卒業。現在、筑波大学大学院修士課程地域研究
研究科日本文化二年在学中。修士論文「耽美派における『紅樓夢』の影響—永井荷風を軸として—」
を執筆中。

The fact that KAFU was concerned with *THE DREAM* can be seen in references to the novel in his diary, *DANCHOTEI NICHIJHO* and in other literary works. In this diary *THE DREAM* is mentioned four times. From these entries we can see that KAFU had read the novel at least four times. As regards his other works, the most obvious case is the poetry quoted from the 45th chapter of *THE DREAM*. The reason why KAFU was so attracted to the poetry was the grief and autumnal mood expressed within. This poem, later translated into Japanese, is contained in the *PENKIKAN GINSO*. KAFU'S *DANCHOTEI* diary gives us an indication of the difficulties that the composition posed to him.

As an avid reader of *THE DREAM*, it's interesting and attractive to see how Japanese authors read *THE DREAM* and how it influenced their works.

荷風の文学作品には、中国文学の影響が随所に見られる。従来の研究は荷風と中国文学との深い絆を指摘しながらも、中国文学が、荷風の作品に、具体的に、どのような影響を与えたかについては、あまり触れていないと考えられる。今度、荷風の日記、随筆および、名作『溇東綺譚』のなかに見出される中国文学の影響を、中国清代の古典小説『紅樓夢』を軸にして探る。

一、父・久一郎と『紅樓夢』

荷風の家系は両親の先祖代々、高名な漢学者を輩出していたが、父の久一郎は、もともと母方の祖父・鷺津穀堂の高弟でもあり、また、明治時期の漢詩人・禾原として、知られている。荷風は、漢詩に関する入門も、初めは、この父の手ほどきを受けた。禾原の漢文と漢詩好きおよび中国趣味は、荷風の随筆のなかに多く出てくるが、明治時期の漢詩詩壇での活躍ぶり、及び当時の文人との

交遊の状況は次の節で、また、詳しく論ずる。

禾原の漢詩集『来青閣集』の中に、『紅樓夢』に因んだ漢詩がいくつか見られる。まず、『来青閣集』巻三、十六に収録されるものである。

暈韻示種竹索再和

春江花月復何云 種竹在海上詩酒徵逐歸來頻言煙花之麗殊称林黛玉色芸双絶

对酒当歌酬応勤 黛玉粉奩刻对酒当歌四字

度曲今推林黛玉、才姿未讓李香君、

吟驢踏破山陰雪、画舫看来湖上雲

絶代銷魂替人在、瀟湘館裏醉醺醺 黛玉有瀟湘館

この題の「種竹」は本田種竹を指す。本田種竹は大沼枕山、森春濤、森槐南とは交遊があつて、永井禾原等とともに、「剪燭会」に参加していた。この詩は、おそらく、当時、唱和したものであろう。詩のなかの「春江花月」はもともと、中国唐代張若虚が作った「春江花月夜」を受けているのではないと思われるが、その詩の主題は大自然の綺麗な景色と庶民の離別、思い合いの辛さを表現している。『紅樓夢』第四十五回、ヒロインの林黛玉はこの「春江花月夜」の格式を模擬して「秋窓風雨夕」を創作したが、「春江花月復何云」の一句を吟じた禾原は実際の人物ー校書林黛玉ーの名前の出所を巧妙に暗喩している。また、詩中の瀟湘館という邸宅は『紅樓夢』のヒロイン林黛玉が住んでいた場所と同じ名前であるが、「黛玉有瀟湘館」の注釈は実在の人物（校書の林黛玉）と『紅樓夢』作中の人物（ヒロイン林黛玉）、両方を指しているのであろう。

次にあげるものは、友人の安否および校書林黛玉が遭難した消息を聞いた禾原の心境を表す詩である。（『来青閣集』巻三、十七）

双芝仙館燭集席間感事賦此

釜魚無策避狂秦、羽檄紛紛報警頻
大國存亡機未定、故人安否報難真 謂楨原書記官
星沈雲裂山河動、玉碎香消草木顰 聞林黛玉橫死于津門
愁煞去年探勝地、滿天烽火漲兵塵

この詩のなかで、「草木顰」を使って、校書林黛玉を比喻するのだが、これもまた、『紅樓夢』のヒロイン林黛玉に因む文句を用いている。『紅樓夢』の中で、林黛玉の前世はもともと西方靈河の岸辺の絳珠仙草であったが、賈宝玉の前世は女媧が石を煉じて、天を補うときに、余った一片の石である。この石は後ほど、赤霞神瑛使者になって、この絳珠仙草を可憐に思い、毎日、丹念に甘露を注いだ。この絳珠仙草は天地の精華を受けて、また、この甘露で潤ったので、草木の形から脱し、人間の女体に化した。ゆえに、詩のなかの「草木」はこの黛玉の正体を指している。また、『紅樓夢』第三回、宝玉は初めて従妹の黛玉に会い、黛玉が字を持っていないと知ったので、「顰」という字を贈った。禾原は「草木顰」に同名の校書—林黛玉を表現している。

その後、この校書を弔う詩作を明治三十三年九月六日付「東京日日新聞」の、森槐南が主宰していた「文苑」欄に発表した。^(注一)

哀林黛玉慘死津門八首

禾原 永井久

瀟湘夜雨夢其淒、笛裏幾向傷別離

今日相思難再見、斷腸人写斷腸詩 林黛玉校書名顰、申江名妓也、芳名

喧噪、推為四大金剛之首班、屢嫁屢出、今年初夏、從津寓某妓院、遇值拳匪之亂、慘死事登申江新聞。校書在申時、有瀟湘館、余屢見校書于酒席文筵、雅善度曲、多和笛歌

紫玉由来易化煙、当年義拳事空伝。

憐卿何処埋香骨、枉費群花買墓田。校書嘆姉妹薄命、勸捐群花義塚、買

地于靜安寺畔、已三年前矣

腥風一陣忽蘭摧、飛信空從北地來。

惆悵清和新里月、夜深猶照旧粧臺。瀟湘館在新清和里

一片俠心無限情、美人埋骨不埋名。

天津橋上雲漠漠、愁聽杜鵑啼血聲。

鵬歎聲哀莫雨天、量珠萬斛今無用。

落花無主恨綿綿、誰向孤墳挂紙錢。

姓字相同是宿因、紅樓夢裏証前身。

葬花心事今猶昔、忍使芳名委劫塵。

相逢已好況同舟、會伴阮郎湖上遊。

慘雨悲風花忽落、惜向有客淚橫流。吾友惜香生深賞校書、年前因事赴

杭、途中遇逢校書、終同舟去相携、

遍探六橋三竺之勝、伝為佳話

欲向重泉酌一杯、追思往事暗愁催。

善論時局善歌曲、絕世風姿絕世才。校書所識、多知名之士、故論時事、

明時局

紅樓夢裏、金釵十二之班頭、春申浦頭、粉黛三千之魁首、前
生今世、芳名任綠鸚之呼、今世前生、薄命還絡珠之淚、猶記
三年前、在徐園初与瀟湘相見、時江建霞侍郎在坐、戲曰、如
今宝玉甚多、不弁孰真孰假、亡幾侍郎湓亡、顰卿亦恨歸離恨
天矣、誦來青八絕、那禁茜紗窓下、黃土隴中之感

菊如澹人

この詩はのちほど四首に書きなおして、「瀟湘林黛玉作」という題名で『来青閣

集』卷三十七に収録される。後に、「菊如澹人」という署名の評論が付け加えられた。「菊如澹人」は森槐南の号であるが、二人は『紅樓夢』を熟読しており、書中人物の境遇と現実を対照させ、『紅樓夢』の典故をうまく踏まえ、独特な詩境を織り成し、また、精彩を放つ評論を付けている。

まず、禾原の詩について。「瀟湘夜雨夢其凄」の一句は『紅樓夢』の第三十七回で、海棠詩社を結んだときに、みんなが林黛玉に名付けた雅号「瀟湘妃子」から取ったものである。また、黛玉の居所の瀟湘館にちなんでいるとも言える。そして、「落花無主恨紛紛」、「葬花心事今猶昔」、「忍使芳名委劫塵」などは、『紅樓夢』の中で、最も膾炙している場面－「黛玉葬花」に因んでいる。それは『紅樓夢』第二十七回「楊妃 滴翠亭にて彩蝶に戯れ、飛燕 埋香塚にて残紅に泣く」のなかで、ヒロインの黛玉が主人公の宝玉と喧嘩したあと、思わず自分の不運を嘆き、また、落花を見て感傷にひたり、作った「葬花詞」である。
(注二)

森槐南が、『紅樓夢』全巻を読破していただけではなく、『紅樓夢』の真骨頂によく通じていたことは、その評論に顕れている。「紅樓夢裏、金釵十二之班頭」はヒロインの林黛玉を指している。『紅樓夢』第五回「幻境に遊びて十二釵の図に迷い、仙酒を飲みて紅樓夢の曲を聞く」のなかで、主人公の賈宝玉は夢を見て、太虚幻境に入った。そこで、仙女が宝玉に見せてくれた「金陵十二金釵正冊」（金陵で最もすぐれた十二人の女子の帳簿である）の第一人者はまさに黛玉である。槐南の「顰卿亦魂帰離恨天矣」一句は、林黛玉（また、校書の林黛玉）の死を示している。その出所は第九十八回「苦絳珠魂帰離恨天」（苦しむ絳珠 魂は離恨天に帰り）からである。
(注三)

「那禁茜紗窓下、黄土隴中之感」の一句では、森槐南の『紅樓夢』に対する読みの深さをしみじみと感じさせる。第七十八回「（前略）痴公子杜撰芙蓉誄」（痴公子は芙蓉の誄を捏ち上ぐ）のなかで、宝玉が最も可愛がっていた侍女晴雯は肺病に罹ったうえ、讒され、大観園から追い出された末に、亡くなってしまう。宝玉は晴雯が死後に芙蓉花神と変化したと信じて、つい「芙蓉女兒誄」

という弔辞を作った。此の弔辞は後の黛玉の死を暗喩している、即ち、黛玉への弔辞とも言える。^(注四) 森槐南の「那禁茜紗窓下、黄土隴中之感」一句は、其の弔辞の「豈道紅綃帳裏、公子情深、始信黄土隴中、女兒薄命」（自ら為えらく紅帳裡に公子の多情なるを。始めて信ずらく黄土隴中に女兒の薄命なるを。）にちなんでいる。ただし、宝玉の「豈道紅綃帳裏、公子情深」一句は第七十九回で、黛玉に「ありふれている」と評され、「茜紗窓下、公子多情」（茜紗窓下、公子多情なるを）と直された。^(注五)

森槐南は、明治十一年六月の「花月新誌」の漢詩をはじめ、明治十二年七月の同誌に、「紅樓夢 黛玉泣殘紅」、明治十二年の「新文詩」に「題紅樓夢後」、明治二十五年四月の「城南評論」に「紅樓夢の序詞」など、『紅樓夢』に関する漢詩、評論を続々と発表して、その愛着心を示している。

森槐南が『紅樓夢』に関する作を発表した前年の十二月、つまり、明治十年であるが、この時期、ちょうど日中国交が始まり、清国公使館一行が来日した。清国の館員たちが、書記官黄遵憲をはじめ、日本の文人に『紅樓夢』を紹介したり、宣伝したりした様子が、『大河内文書』という筆談記録に残っている。この黄遵憲が、特に、森槐南の才能を激賞しており、また二人はそれぞれの著作の中で、お互いのことに言及している。森槐南が『紅樓夢』に初めて接したのはこの時期であり、また、『紅樓夢』が森槐南より、槐南と交遊した詩人の間に流行しはじめたのも、おそらくこの時期であろう。禾原もその中のひとりである。

禾原の「来青閣集」の中で、『紅樓夢』に関係する主な四首の詩のうち、最後に、次の「雨瓊仙館小飲席上贈林黛玉詞史」を取り上げる。この詩は、既に述べてきた最初の二首の漢詩とつながって、校書林黛玉を吟詠の対象としていた。先出の「哀林黛玉慘死津門八首」は、この校書の横死したことを聞いて、弔いのために書いたが、後程、此の噂が単なる誤伝であったと判明した。後年、禾原はまた中国に赴き、申江（上海の旧称）で、この校書と再会した。原作は、

「来青閣集」巻四、十八に収録されている。

「雨瓊仙館小飲席上贈林黛玉詞史」

玉碎香消一愴神、紛紛蜚語未會真。客年北方匪乱、詞史在津門、一時伝

説其横死、余亦詩以弔之事、全訛

東瀛詞客緣愁瘦、北里煙花歷劫新。

白髮又尋全度夢、紅妝疑是再生人。

風流今日持螯会、節後菊枝看更親。詞史構雨瓊仙館于申江、門牌独掲其

妹妃雪之名、然容色未衰、意氣尚豪、

与客喜談往事、且論時局 旧識士人

問訊者対太多、為之門前車馬成市

前の二作と同じく、この校書と『紅樓夢』のヒロインが同名という縁から、自然に、詩の引用の文句も『紅樓夢』につながっている。ここで、関連していると見られるところは「風流今日持螯会、節後菊枝看更親」の一句である。『紅樓夢』第三十八回「林瀟湘 菊の詩に首席を奪い 薛衡蕪 蟹の詠に和して諷す」のなかに、宝釵と湘雲が宴会を主催し、みんなで、蟹を食べながら桂花を觀賞する場面がある。一方、主人公賈宝玉と従姉妹、姉妹たちの詩社―「海棠詩社」の例会を開き、「菊の詩」を題として競い合う。書中の季節背景は中秋節がすぎたばかりで、一家団欒のところである。^(注六) 禾原の此の句はちょうどこの情景をふまえて、その再会の歡喜を表わしている。又、此の三十八回の、「蟹を食う」詩―「持螯更喜桂陰涼、澆醋搗拳興欲強」(蟹を持って更に喜ぶ桂陰の涼しきを、酢を澆けは薑を搗り興じて狂わんと欲す)^(注七)と、薛宝釵の「菊を憶う」詩―「誰憐我為黃花瘦、慰語重陽会有期」(誰か憐れまん我が黃花の為に病めるを、慰めて語るらく 重陽には会ならず期有らんと)

^(注八) 二首の詩の、秋の情緒を醸し出す技巧は、禾原の此の句にその面影が見

える。

禾原が『紅樓夢』から受けた影響は、以上三首の詩に最も顕著に現われている。『紅樓夢』話筋だけではなく、特にヒロイン個人の内面的な心境をうまく捉えて、それを借り、現実を吟ずることには、再々、『紅樓夢』を熟読した跡が見られる。

大正二年、禾原が亡くなり、同年の十二月、荷風は、禾原の漢詩文集『来青閣集』十巻を印刷して、父の知友に配り本として贈った。『来青閣集』は、赤瀬雅子が「座右の書のひとつと見られる」と指摘するように荷風の終生の愛読書である。自身の作品にも、この、『来青閣集』の詩作を、何気なく引用する箇所が目立っている。禾原は明治三十年五月から三十三年二月まで、日本郵船会社上海支店に、支配人として赴任した。『来青閣集』巻二と巻三の詩作は、全体的に見れば、上海赴任中の作が多い。その中には、上海の画舫（船の妓楼）と遊里の校書に贈った艶体の詩が最も多く、注目される。荷風もこのことに気付いて、随筆「矢はずぐさ」で、以下のように書いている。^{（注九）}

「わが父はこの上なく物堅き人なりき。然れども生前自ら選みたまひし其の詩稿来青閣集といふを見れば

良辰佳会古難並。玉手摻摻酒幾巡。休道詩人無艶分。

先従花国賦迎春。新歳竹枝

春鳥無心喚友啼。蘭舟繫在水祠西。暖波一面花三面。

真個溫柔郷此堤。看花七絶

の如き艶体の詩を誦し得るなり。又、會て中国に遊び給ひける時姑蘇城外を過ぎて妓に贈り給ひし作多き中に

麗質嬌姿本絶群。蘭房別占四時春。相逢無語翻多恨。

桃葉桃根画裏人。

如在沈香亭北看。妖姿冶態正春蘭。多情是傾城種。

不信小名呼墨蘭。

の如き能くわが記憶する所なり。現に城南新橋の畔南鍋街の一旗亭にも銀屏に
醉余の筆を残したまへるがあり。」

このような興味津々の筆致から見れば、荷風の花柳文学の趣向は禾原の香奩
体趣味の「教坊文学」に教唆されたと、敢えて言うことができるだろう。禾原
の『来青閣集』のなかで、『紅樓夢』に因んだ詩作も「教坊文学」のジャンル
に入る。又、書中の話筋や人物関係を熟知しているように、巧みに詩作に織り
成すことは、『紅樓夢』に詳しいことを裏付けている。『来青閣集』を愛読する
荷風がこのような肝心な箇所を見逃すことは、おそくないであろう。

二、荷風の日記および作品に現れる『紅樓夢』

荷風が、初めて『紅樓夢』を読んだのが何時であったのかは、明瞭ではない。
ただし、日記『断腸亭日乗』で、はじめて『紅樓夢』に触れた記録は大正六年
十二月三十一日の条である。その内容によって、それ以前に、既に『紅樓夢』
を閲読したことがあったことが分かる。その内容は以下のようである。^(注十)

「風あり。砂塵濛々たり。午後空くもる。雪を憂ひしが夜に至り二十日頃
の月氷の如く輝き出でたり。家に籠りて薄田泣菫子の小品文集落葉を読
む。余この頃會て愛読せし

和洋書卷の批評をものせむとの心あり。

依りてまづ泣菫子が旧著を取出して一読せしが思ふところ直に筆にしが
たくして休みぬ。今余の再読して批評せむと思へるものを挙ぐるに

落葉 薄田泣菫著

照葉狂言 泉鏡花 著

今戸心中 広津柳浪著

三人妻 尾崎紅葉著

一葉全集	樋口一葉著
柳橋新誌	成島柳北著
梅暦	為永春水著
湊の花	為永春水著
即興詩人	森鷗外 著
四方のあか	蜀山人 著
うづら衣	横井也有著
霜夜鐘十時	黙阿彌 著
辻占	

其他深く考えず。漢文にては入蜀記、葉根譚、紅樓夢、西廂記、隨園詩話等。西洋のものはまた別に考ふべきなり。」（傍点筆者）

再読して、批評しようと考えた多くの本があり、『紅樓夢』もその中の一冊である。しかし、この書名が『断腸亭日乗』に再び登場したのは大正十一年二月二十日の条である。

「大正十一年二月二十日 微恙あり。躬ら麵麴を切り珈琲を煮る事の煩しければ、衣を厚くして銀座に往き食事をなす。帰途日比谷公園を歩みて樹下に憩ふ。偶然代地の僑居にて世話したり女に逢ひ、山城河岸の待合に往きて飲む。夜幸田先生譚紅樓夢を繙きて眠る。」（傍点筆者）

ここの「幸田先生」は幸田露伴のことである。日記で言及している『紅樓夢』の訳本は、幸田露伴と平岡龍城が共訳したものとして、国民文庫刊行会刊成の「國譚漢文大成」文学部第十四、十五、十六巻の『紅樓夢』上、中、下巻があるが、その十四巻〈『紅樓夢』上巻〉は大正十年一月、第十五巻〈『紅樓夢』中巻〉は大正十年九月三十日に刊行された。荷風が、閲読したのは以上のものに間違いない。

多数の露伴の著作を閲読した記録を残した荷風は、露伴が訳した『紅樓夢』を繙いたと同時に、いくつかの露伴が書いた『紅樓夢』に関する評論をも見逃す可能性は低いであろう。

次に、「断腸亭日乗」で『紅樓夢』にふれた三回目の記録を挙げる。

昭和九年十月十五日

天気晴朗。南風吹きて梢あつし。午後朝日新聞社社員坂崎坦。後醍院良正の二氏。日高君と共に来る。拙稿断腸花の稿料を持参せられしなし。其巨額なるに一驚を喫す。昏黒銀座通に往き銀座食堂に飫す。垂凡茶店門口を過ぎしが知る人不在ざるを以て直に帰る。燈下紅樓夢第四十五回中の秋窓風雨夕の一節を和譯して小唄をつくらむとせしが作り得ずして原文は左の如し。

秋窓風雨夕

秋花惨淡秋草黄。 耿耿秋燈秋夜長。
已賞秋窓秋不尽。 那堪風雨助淒涼。
助秋風雨来何速。 驚破秋窓秋夢綠。
抱得秋情不得眠。 自向秋屏移淚燭。
淚燭摇摇地短檠。 牽情照恨動離情。
誰家秋院無風入。 何處秋窓無雨聲。
羅衾不奈秋風力。 殘漏聲催秋雨急。
連宵霰々復颼々。 燈前似伴離人泣。
寒煙小院轉蕭條。 疎竹虛窓時滴瀝。
不知風雨幾時休。 已教淚洒窓紗濕。

この詩は、『紅樓夢』のヒロイン林黛玉の、封建制度からの恋愛の自由に対する厳しい制限、強大な圧力の下にある自分の運命および将来に対する悲觀的

な予測である。『紅樓夢』全書のクライマックスのひとつでもある。また、荷風の人口に膾炙する名作『溍東綺譚』の最後で、主人公は娼婦お雪と別れた時期、ちょうど、秋の季節に巡りあい、秋風秋雨に肆虐された後の庭を見て、この「秋窓風雨夕」の冒頭の一節を想起する。『紅樓夢』の版本は色々あり、この「秋窓風雨夕」もそれらによって、綴りが違う。福田清人編、網野義紘著の『永井荷風 人と作品』（昭和二十五年、清水書院）ではこう書いている。

「大江が毎年翻訳しようと思ひ煩う中国の小説『紅樓夢』中の詩は、作中人物のなんの寄るべも持たない女性林黛玉が病床で「別離に代えて」（傍点筆者）という題で作った詩の一節であるが、この作品の引用箇所「己賞秋風秋不尽」（傍点筆者）とある。因みにこの箇所は松枝茂夫訳『紅樓夢』（岩波文庫）では「已に覚ゆ秋窓に秋の尽きざるを」（傍点筆者）である。「賞」には荷風その人の感情が表れているのかもしれない。」

筆者の調べによると、引用した箇所「己賞秋風秋不尽」の「己」は「已」の間違いではないかと思う。ここで、荷風が引用した箇所「已賞秋風秋不尽」と松枝茂夫訳『紅樓夢』（岩波文庫本）の「已に覚ゆ秋窓に秋尽きざるを」との違いは、「賞」の方は、荷風個人の感情表現とされている。実は、それは単に引用した版本が違うというわけである。

各版本による「秋窓風雨夕」の綴りの違いは、いくつもの箇所で見られる。以下、荷風が引用した「秋窓風雨夕」と対照してみながら、違うところを摘出してみる。^{（注十一）}

「己賞秋窓秋不尽」：荷風、戚蓀生序鈔本

「已覚秋窓秋不尽」：程乙本、東觀閣本、庚辰鈔本、王希廉評本、程丙本、甲辰本

「驚破秋窓秋夢[・]緑」：荷風、戚蓼生序鈔本、庚辰鈔本、甲辰本

「驚破秋窓秋夢[・]統」：程乙本、東觀閣本、王希廉評本、程丙本

「抱得秋情不得[・]眠」：荷風、戚蓼生序鈔本

「抱得秋情不忍[・]眠」：程乙本、東觀閣本、庚辰鈔本、王希廉評本、程丙本、甲辰本

「自向秋屏移[・]淚燭」：荷風、戚蓼生序鈔本、甲辰本

「自向秋屏挑[・]淚燭」：程乙本、東觀閣本、王希廉評本、程丙本

「自向秋屏剔[・]淚燈」：甲辰本

「牽情照恨動[・]離情」：荷風、戚蓼生序鈔本

「牽愁照眼動[・]離情」：東觀閣本、王希廉評本、甲辰本

「牽林照眼動[・]離情」：程乙本、程丙本

「牽愁照恨動[・]離情」：庚辰本（傍点筆者）

以上のように、荷風が引用した「秋窓風雨夕」は、各版本のそれと対照してみた結果、戚蓼生序鈔本とぴったり一致している。この戚蓼生序鈔本は、『紅樓夢』の旧鈔本系統に属している八十回本で、『紅樓夢』原本に近い版本といわれている。清朝末期、有正書局に出版されて、そのため、戚本又有正本という別称がある。幸田露伴と平岡龍城が共訳した「國譯漢文大成」の『紅樓夢』の冒頭に、版本の引用について、ここに節録する。^(注十二)

「本書に数種ありて、文字の舛訛甚だしく、適従するに苦しみしに、先年原本紅樓夢八十回本の刊行あり、善本なるが故、本書は一にその書に依ることにしたり。」

この上巻の発行時期は大正九年十月であったが、ここで、「先年原本紅樓夢八

十回本の刊行あり」ということは、有正書局が刊行した有正本又戚本のほかにはないと思う。又、その翻訳および本書に付いた原文と対照してみれば、荷風の引用箇所とはぴったり一致している。荷風の日記にある「秋窓風雨夕」の出所はこの「國譯漢文大成」についている原文『紅樓夢』であろうとほぼ判断できる。

荷風が「思い煩う」この「秋窓風雨夕」の和訳について、六年後の「断腸亭日乗」で、再び触れている。

「昭和十五年一月九日 新寒脉々たり。去年より残りの炭あれど行先の寒さを思ひ忍び得らるゝ、かぎりは忍びて見むと牛乳をわかしてウイスキーを混じ、之を飲みて後寐床の中に半日を送りたり火ともし頃房陽子岩波書店用件にて来り話す。共に銀座食堂に登りて夕餉を喫す。銀座通の人出おびただしきこと西の市の比にあらず。帰宅の後燈下紅樓夢篇中の長詩秋窓風雨夕を和譯す。」

（傍点引用者）

後程、この和訳は「秋窓風雨夕」という原題を付して、昭和二十一年九月、出版された『来訪者』のなかに収録されている。

「断腸亭日乗」以外に、荷風が自作で『紅樓夢』に言及したのは、「毎月見聞録」と大正十三年五月五日に発表した「桑中喜語」、そして昭和十三年七月、岩波書店発行の作品集『おもかげ』に収録された『自選荷風百句』のなかの一句の俳句である。

まず、「毎月見聞録」について、述べる。それは大正五年四月から、大正七年十一月一日までの荷風が節録した世の出来事である。そのなかで、筆者の目を引いたのは大正七年八月のひとつの記事である。ここに、摘出する。

「八月上旬 塩谷温紅樓夢梗概を草して帝国文学八月号に寄す。」

荷風がわざわざ、この『紅樓夢』に関する評論の記事を取り上げるのは、当書の動向に、相当関心を持っていた証である。

塩谷温が、緑陰茗話という題の評論を、(上) 西廂記、(下) 紅樓夢とに分けて、それぞれ、大正七年『帝国文学』の七月号と八月号に発表した。荷風が、その(上)の西廂記に触れずに、(下)の『紅樓夢』に着目したのは、『紅樓夢』にかなり注目していると解釈されよう。ふたつの評論は後に、『支那文学概論講話』(大正八年五月「大日本雄弁会」)に収められた。『西廂記』は、大幅に変動して、書き直したといえよほどだが、『紅樓夢』は、ほぼ当時、帝国文学で発表した原文を基として、いくつかの資料を書き加えている。

つぎは、大正十三年に、発表した「桑中喜語」(原題「猥談」)で、通俗小説の創作について、こう述べる。

「通俗の本旨既に色欲淫事に在り。然とすれば一たび筆を通俗の小説に乘らんとするもの、淫事を他にして又何をか描かんや。源氏物語は我國淫本の権輿なり。泰西にボツカーツの浮世草紙、ナワール女王の懺悔録等あり。漢土に趙飛燕外伝、雜事秘の類あり。近世に至つて紅樓夢金瓶梅の如き、読む者をして、アヂな気を起こさしむ。」

ここで、まず、本文の「雜事秘」という書名は、「雜事秘辛」との間違いであると考えられる。まず、中国の漢時代に、有名な俗小説は「秘燕外伝」と「雜事秘辛」の以外はない。岩波文庫の昭和四十三年版および、昭和五十年版の「荷風全集」を調べたが、両方とも「雜事秘」であったため、荷風がこの書名を間違った可能性が強い。

昭和十二年、「自選荷風百句」が出版されたが、その中の一句の俳句がわたしの目を引いた。夏の部に収録されている「芍薬やつくえの上の紅樓夢」という句である。^(注十三) この句は、作者の紅樓夢を閲覧する姿を想像させる。

日夏耿之介がこの俳句について、「荷風文学」（1990年1月、「日本図書センター」）で、「特に目についた」（「おもかげ」 p. 180）と述べている。また、当書の「荷風俳諧の粹」で、この句についてこう評している。

「葉ざくらや人に知られぬ晝あそび
は

芍薬やつくえの上の紅樓夢
とともに『氏らしい句』として、その小説を知る人は北叟笑むで読み返してみることであろう。葉ざくらではなくては赤坂あたりの晝あそびが栄えず、芍薬でなくては石頭小説が訓点づきのものをいわない処である。…」（傍点筆者）

ここで、『氏らしい句』との一言には『紅樓夢』を愛読する荷風の姿が鮮明に顕れている。また、荷風が閲覧した『紅樓夢』は原文の版本を暗示している。『中国の八大小説』（大阪市立大学中国文学研究室、昭和四十年六月、平凡社）の序を、武田泰淳が執筆しているが、その冒頭の一句はこの「芍薬やつくえの上の紅樓夢」である。該当文章のなかで、荷風の内面的な本質を、こういう比喻でたとえる。

「ひとまず荷風を大観園から脱出した賈宝玉になぞらえるとしても、露伴をはたして宋江や魯智深の豪傑の徒に入れるべきや否や、まどわざるを得ない。…」

荷風を賈宝玉と擬しているのである。荷風が『紅樓夢』に魅了されたひとつの原因は、書中の主人公の生き方や、性格と自分の深層の内面的な特質にはつながる部分があることに、と気付いたためではないだろうか。

三、『溍東綺譚』における「秋窓風雨夕」の役割

荷風の散文風的、また、詩風的作品には、秋の季節、雨、病鬱、嵐に肆虐された、痛々しい植物の無残な跡という要素が含まれているとされる。『雨瀟瀟』の冒頭は、まさにそのパターンである。

「其の年の二百十日はたしか涼しい月夜であった。…夜になってからはさすが厄日の申し訳らしく降りだす雨の音を聞きつけたもののしかし風は芭蕉も破らず紫苑をも鶏頭をも倒しはしなかった。」

『溍東綺譚』結末の部分では、『紅樓夢』の第四十五回「秋窓風雨夕」が引用されている。特に、ここに、この要素が最大限に発揮されていると思う。^(注十四)

「四五日過ぎると季節は彼岸に入った。空模様は俄に変わって、南風に追われる暗黒の低く空を行き過ぎる時、大粒の雨は礫を打つように降り注いでは忽ち歇む。夜を徹して小息みもなく降りつづくこともあった。わたくしが庭の葉鶏頭は根元から倒れた。萩の花は葉と共に振り落とされ、既に、實を結んだ秋海棠の紅い茎は大きな葉を剥がれて、痛ましく色が褪せてしまった。濡れた木の葉と枯枝とに狼籍としている庭のさまを生き残った法師蟬と蟋蟀とが雨の霽れま霽れまに嘆き叩うばかり。わたくしは年々秋風秋雨に襲われた後の庭を見るたびたび紅樓夢の中にある秋窓風雨夕と題された一篇の古詩を想起す。

秋花慘淡秋草黃。

耿耿秋燈秋夜長。

已賞秋窓秋不尽。

那堪風雨助淒涼。

助秋風雨來何速。

驚破秋窓秋夢綠。

.....

そして、わたくしは毎年同じように、とても出来ぬとは知りながら、何とかうまく翻訳して見たいと思い煩うのである。」(傍点筆者)

荷風が、この「秋窓風雨夕」を試して訳したのは、昭和九年十月十五日である。『湊東綺譚』は、昭和十二年四月十六日付から同年六月十五日まで、「東京朝日新聞」、「大阪朝日新聞」夕刊に連載された。昭和十五年十二月に刊行された詩集『偏奇館吟草』にも「秋窓風雨夕」が収録されている。つまり、「毎年同じように、とても出来ぬとは知りながら、何とかうまく翻訳して見たいと思い煩うのである。」として、自分が満足出来る作品が出来上がるまで、七年もの歳月もかかった。この古詩に対する執着心は、並々ではないと思われる。荷風にとって、この詩の魅力の所在は、何処であろうか。この詩の元出所『紅樓夢』第四十五回の内容より、ヒロイン林黛玉が「秋窓風雨夕」を詩作するまでの経緯を抜き出してみる。

『紅樓夢』の第四十五回で、女主人公林黛玉は毎年、春分と秋分のあとは、きまって持病の痰咳がでるのであるが、近頃また咳をしはじめ、しかもどうやらいつもより重いように思われる。それで外出はいっさいやめて、ひたすら自分の部屋にこもって、養生している。この夕方、もうひとりの女主人公・薛宝釵との約束があって、待っているところである。

「こちらは黛玉、うすい粥二口三口すすってから、また寝台に横になった。すると、まだ日も沈まないうちに、空模様が急が変わって、しとしと雨が降りだした。秋の霖雨は霏霏として、晴曇がきまらない。その日いつしか黄昏れゆくころには、どんよりと曇って、竹の葉末に落ちる雨の雫の音さえ加わって、物寂しさはそぞろに身にしみる。これではもう宝釵さんもこられまいと、燈火の下に手当たりしだいに一冊の書物を取り上げてみると、それは『楽府雜稿』で、「秋閨の怨」とか「別離の怨」と

いった詞があった。黛玉はふと心感ずることがあって、それを詩詞に現わさなくてはならぬままに、ついに「別離に代えて」という一首を作り、「春江花月夜」の体にならって、それを「秋窓風雨の夕」と名付けた。…」^(注十五)

この「秋窓風雨夕」が生まれた自然背景の描写と荷風がこの「秋窓風雨夕」を引用する前置きの描写は、まったく一致しているといえよう。この「秋窓風雨夕」の引用は、作者の意図的な計算である。「秋の季節」、「雨」、「病鬱」といった、この「秋窓風雨夕」に内在する要素は、荷風の『溍東綺譚』の実質的な要素に、かなり近いと思われる。あえていえば、荷風という人間の内面的なものに近いといえるかもしれない。坂上博一の指摘によると、「もともと荷風とは、寂寥をこよなく愛し、そこから尽きせぬ詩の泉を汲みとろうとする芸術的個性であったことは、(略) 荷風の全作品がこれを証しているといつてよい。時によれば、詩の泉を汲み取らんがため、求めて悲哀寂寥を感じずに都合よい境地にまで追いやろうとするくらいである。」^(注十六) という。

この「秋窓風雨夕」は、楽府古体詩の形を取っており、二十句の中に、十五字の「秋」を用いている。荷風は、物語の最後で、秋の季節の訪れとともに、物語の中の主人公・大江匡が娼婦お雪と別離するというクライマックスを迎えるところに、この「秋窓風雨夕」を引用した。

また、引き続き、主人公＝作者は、お雪と再会する場面を想像して、「楓葉荻花秋は瑟瑟たる刀禰河あたりの渡船で摺れちがう処などは、殊に妙であろう。」として、それ以前の戯作「秋の別れ」の場面をも引用し、この作品の基調となる「秋」という旋律をさらに、聴かせている。

「『溍東綺譚』をつらぬいているものは散文精神ではなく、詩的精神である。」、また、「『溍東綺譚』における荷風を、風俗作家ではなくて詩人だ」と野口富士男氏は指摘している。^(注十七) 深く哀愁を感じさせる、秋をトーンとする「秋窓風雨夕」は、この『溍東綺譚』という作品を締め括る役割を、

十二分に果たして居るといえよう。

おわりに

最後、荷風の私的な面について、『紅樓夢』という小説との因縁を分析してみる。

荷風が『紅樓夢』に魅了されたもうひとつの原因は、書中主人公・賈宝玉との共通点を持っていることにあると思う。『紅樓夢』のなかの賈宝玉は富裕な貴族家庭の出身で、封建社会の立身出世の標準を痛恨し、父とは相容れない状態に追い詰められて、最後、自分の主張を貫くため、家出という非常手段を採ることを惜しまず、家族と決裂することを決めた。

良家の出の荷風も同じく、当時、世間や父・久一郎が望んでいた官吏や実業家の立身出世コースを踏まずに、家族の輦轡を顧みず、良家子弟の身分に相応しくない小説家という職業を選んだ。

日夏耿之介は「荷風の思想的立場を論ず」の一文で、『紅樓夢』第二回を引用して、荷風の性格及び思想を論じている。^(注十八) 日夏耿之介が引用した『紅樓夢』第二回の部分は、『紅樓夢』のなかで、もともと主人公賈宝玉とヒロイン林黛玉の性格、思想を論じるところである。ここからも分かるように、荷風、賈宝玉、林黛玉の思想的立場は基本的に一致している。荷風、賈宝玉、林黛玉三人とも、自分の所属階級への反逆者である。また、三人とも、あえて、封建社会の枠を破り、また、その社会の家長権威に挑んだ、反骨精神の持ち主である。しかし、封建社会の反逆者として、対外の抗争と対内の葛藤との二重の圧迫に臨んで、かなりの辛さに伴うことになるであろう。『紅樓夢』のヒロイン林黛玉は、このような重圧に直面して、はけ口を求めるため、惨憺な秋の雰囲気の漂う「秋窓風雨夕」という詩編を織り成した。

荷風が、この「秋窓風雨夕」に並々ではない愛着を示すのは、『紅樓夢』の登場人物に自分と重ね合わせ的部分を感じ取ったのではないか。『溼東綺譚』を創作した荷風の当時の心境は、寂寥な秋夜に彷徨う黛玉の魂と重層しながら、

『溍東綺譚』の中の感傷的なムードを醸し出している。『溍東綺譚』全編に流れている詩情を貫く要素に、この「秋窓風雨夕」が与えた影響は、非常に大きいといえる。

注

- ①「東京日日新聞」明治三十三年九月六日付の「文苑」欄
- ②原本は『紅樓夢』 曹雪芹（中華図書公司 1976年）、日本語譯本は『紅樓夢』 松枝茂夫訳（岩波書店、1990年1月）を参照する。
此处の出所は第二十七回。
- ③同注②第九十八回
- ④『紅樓夢詩詞解析』 劉耕路 1986年4月 吉林文史出版社
- ⑤同注②第七十八回
- ⑥同注②第三十八回
- ⑦同注②第三十八回
- ⑧同注②第三十八回
- ⑨『荷風全集』第14巻 p. 261-262 永井壮吉 岩波文庫 1975年
- ⑩日記の部分はすべて、『荷風全集』（永井壮吉 岩波文庫 1975年）から引用した。
- ⑪ここで、あげた『紅樓夢』の版本は、それぞれの発見年代（千支）、版本所有者に因んで、名付けられている。
- ⑫『国譯漢文大成』第4巻文学部第2輯 「凡例」p. 1278 幸田露伴国民文庫刊行会 1940年2月
- ⑬『荷風全集』第11巻 永井壮吉 岩波書店 1968年（1975年版、同書店の『荷風全集』に収録されていない。）
- ⑭『荷風全集』第9巻 p. 177-178 永井壮吉 岩波書店 1968年
- ⑮『紅樓夢』五 p. 148-150 松枝茂夫訳 岩波書店、1990年1月
- ⑯『永井荷風』－「『溍東綺譚』論」 坂上博一 國書刊行会 1988年6月
- ⑰『わが荷風』－「それが終わるとき」 野口富士男 集英社 1973年八月
- ⑱『荷風文学』－「永井荷風の思想的立場を論ず」 日夏耿之介 日本図書センター 1986年3月

討議要旨

小西甚一氏から、「荷風の文体は真似ようとしても真似のできない、独特なものです。おそらく『紅樓夢』のようなものを読んでいなかったら、あんな文体はできなかったろう。『紅樓夢』の文体には不思議な魅力がある。御発表の面とは別に、文体の側面からも考えてみられてはどうか。」との示唆があった。